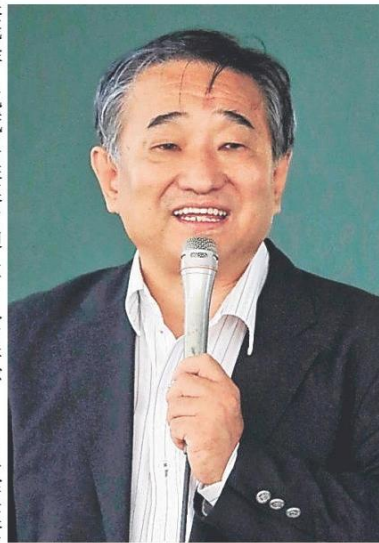


アグリビジネスの実践

経営トップ講義 @県立大 「ビジネス経済の実践」要旨

①



「農業は可能性を秘めている」と語る山口社長
■県立大佐世保校（山口隆行撮影）

おおむら夢ファーム・
シュシュ社長
やまくち なるみ
山口 成美氏

ているだろうか。20円〜25円だ。コンビニのおにぎりは100円〜130円になる。20円と100円ではなく、20億円と100億円と考えるとどうだろうか。これが付加価値だ。これこそ日本で農業や漁業が衰退しコンビニが増えている現状だ。

直売所は全国2万3千カ所あるが、ほとんどの生産者は通うのがきついため1日1回しか持っていない。しかしお客さんは新鮮さを求めている。シュシュは半径2キロ以内の生産者が何度も持ってくる。お客が求めるものに自分たちが対応することが大切だ。

大村の特産に「黒田五寸人参（にんじん）」がある。生産量は10分の1になった。とても甘いが割れやすい。私たちが規格外を使ってジュースを開発した。11月から収穫で

きるが糖度は5・5度しかない。2〜3月になると糖度は9・5度になる。しかしそこまで待つと割れる可能性がある。農家は嫌がった。そこですべて買い取った。農家は収量と収入が1・5倍になった。砂糖を入れなくていいから私たちの経費も浮く。客の健康志向にも合う。こうして特産品を作り続けている。

就職試験の作文では「農産物を元にした新商品のアイデア」を提出してもらっている。そこで皆さんの先輩から「トマトゼリーを作ったらスイーツ感覚で食べられる」と提案があったので、商品化した。農業は可能性を秘めている。

私も古里の長崎を誇りある地域にしたい。優秀な人材が流出している。皆さんは金の卵だ。一緒に観光、農業とも一体になって長崎を豊かにしていきたい。

（西村伸明）

次回10月24日に掲載します

農業は可能性を秘めている」と語る山口社長

農業は可能性を秘めている」と語る山口社長

農業は可能性を秘めている」と語る山口社長

農業は可能性を秘めている」と語る山口社長

農業は可能性を秘めている」と語る山口社長

県立大地域創造学部実践経済学科2年生を対象とした「ビジネス経済の実践」は、地域の中核企業で経営に携わるトップ14人が働く意味や経営理念、企業戦略を語る。10月10日から来年1月23日まで開かれる講義の要旨を順に掲載する。

農業をビジネスにする具体的な取り組みが6次産業化だ。どうやって地域に活気をもたらすかについて話をしたい。シュシュは大村市の中山間

地域に農業を通して人を呼び込もうと2000年に設立した。ビニールハウスで農産物を扱う直売所から始めた。現在従業員は72人で、その8割は女性だ。

農業の従事者数は192万人でこの20年で半分になった。70歳以上が約5割だ。これ以上衰退させてはならないと考え取り組んでいる。

6次産業化は1次産業と2次産業と3次産業の掛け算だ。1次産業の農業がなくなれば0×2×3×10だ。皆さんはパンや麺をよく食べるだろうが、主原料の小麦は96%が輸入だ。小麦が入ってこなくなれば、パンや麺を作る技術や販売するノウハウがあつても成り立たない。

お茶わん1杯の原価を知って

お茶わん1杯の原価を知って

お茶わん1杯の原価を知って

客が求めるものに対応